

れた参考書は、地方志がもっとも多いが、その他の史籍・文献・資料もよく蒐集されていることがわかる。但し、この様な場合で、されば書名のみでなく、巻数、刊年、刊本（叢書名）等も、ぜひ書き添えていただき。今後も続編を刊行される予定と思われるから、是非今後は筆者の要望に答えていきたい。

最後の「後記」で、編者は前書が海外の学者からも高く評価されたことを述べているが、本書にしても、前書にし

ても、明・清の社会経済史を研究する者にとっては、すぐある有益な、便利な資料集である。このような資料集が国内出版であるため、外国人研究者にとっては、入手がすこぶる困難なことは、本当に残念である。今後の刊行に当つては、外国人研究者も自由に入手できるような方法を講じては頂けないだろうか。筆者の切なる希望である。最後に、斯かる貴重な資料集の編纂をつづけておられる陳学文氏に、心からの敬意を表したい。（一九九〇・一・一〇）  
(一九八九年四月、浙江省社会科学院、B六判、二五一頁)

S=G=クリヤシユトールヌイ

### 「古代テュルク語資料に見られる 神話体系の主題」

護雅夫

本論文は、八一〇世紀の古代テュルク語ルーン文字資料、および、それらを補うものとして、ほぼ同時代のほかの資料、——これらに拠つて、「ただ、古代テュルクの神話体系の、予想される主題的図式との関連においてのみ、『オルホン』、パンテオンについての諸問題」を考察したものである。

クリヤシユトールヌイは、こうした図式として、(1)宇宙開闢論と宇宙論、(1)天地開闢と天地の構造とに関する神話、(2)宇宙の破局に関する神話、(2)パンテオン、(1)神々と神々の威力とに関する諸神話、(2)神による国家の創造、および、天による可汗たちの誕生に関する神話、(3)民族発生論と系譜論、(1)テュルク諸部族の起源に関する神話、(2)始祖たち—文化英雄たちに関する諸神話、——これをあげ、順次、これについて、ほぼつぎのよつて検討してゆく。  
天地開闢に関する神話は、Köt-tegin, Bilgä-qayan 両

碑文の冒頭に、独立した主題としてではなく、ただ、古代テュルクのあいだで周知の文言を想起させるものとしてだけ叙述されている。すなわち、「上方で蒼色の天（*kök täpri*）、下方で褐色の地（*yaryız yer*）が創造された」と、「これら二つのあいだに、人の子たち（*kişî oṛfi*）が創造された」とある。ここでは、創造の行為に当たっての何らかの因果関係はしめされてらず、創造主、および、創造以前の状態（混沌？）を暗示する語句は見られない。テュルクのあいだに創造主に関する知識があつたことを間接的に伝えるのは、テュルクは「天地を創造したものをおめる」という、テオフィラクトス・モカツテス（Theophilactos Simocattes（七世紀）の記述である。しかし、J=P=ルー（J.-P. Roux）によると、この証言は、テオフィラクトス・モカツテス自身の所信の「反映」である公算が大きく、至高の存在による天地の創造と云う観念は、「アルタイ」諸民族のあいだでは、モンゴル時代になつて確認されはじめるという。

天地の構造について云々ば、ルーン文字資料の作成者たちは、蒼穹が人間などの居住世界、つまり、「褐色の地」を「屋根」として覆つて云ふと見なして云つた。いづした比喩的表現は、いわゆる「Tuba河第一銘文」に、ひめのよう見られる。

(2) täprim öčük bizka [bol]

私の天よ、屋根として 我々に あれ！

Idil yerim a bängü bol  
Idil の 私の地よ、おお、 永久で あれ！

天——「屋根」——ふねに結びつけてそれを象徴するのは、地上生活と密接な関係をもつ、日」とに生まれる太陽と月とであった。イエニセイ銘文には、その主人公が死を表現して、「蒼色の天で、私は、太陽と月とを失つた！」とのべた決まり文句がしばしば見られる。そして、オルホン-テュルクが四方をしめすのに、まず、東方（前方）からはじめて、「前へは、太陽の生まれる方へ」としるしていくのは、彼らが「生まれる太陽」を崇拜していたことを証明する。また、「(可汗)牙帳東開、蓋敬日之所生」という史料もある。れんに、沙鉢略可汗と啓民(啓人)可汗とが、隋の文帝にあてた上表文中で、それぞれ、「儀之所覆載、七曜之所照臨」「如天無不覆也、如地無不載也」とのべて云ふのは、上述のような「古代テュルクがいだいていた世界像をしめす重要な証拠である。

ルーン文字テキストで *kök täpri* と呼ばれて云ふ「宇宙の一部」としての天は、ほかの古代テュルク語資料では、*kök* をやもなつた別の形でしめされている。たとえば、*kök öyrisi* (「天球」) 以外に、*kök qalıq* があるが、じく

であり、また、たんに *qalıq* としても見られるが、これらは、「大空」「蒼穹」「近い天」をあらわす。*qalıq* は、動詞 *qalı-*（「昇る、飛びたつ」）から派生した名詞であるから、この語の本来の意味は、鳥がそれに向かって飛びたつ近い天と関連がある。*qalıq quşları*（「天の鳥たち」）という表現も、このさい、参考になる。」のような、意味におけるある程度のばらつきは、すでに、古代テュルク時代に、幾つかの、または、少なくとも二つの天球——「高い天」と「近い天」——に関する観念が成立していたことを推定させる。

地は、ルーン文字テキストの作成者たちの考えるところでは、その縁辺に沿つてテュルクに敵意を有する諸民族が住む四角形（四辺形）の空間であった。ルーン文字資料では、世界の境界をしめすのに、一貫して、*bulug*（「隅」、[角]）の語が用いられていて、

*tört bulug*  
[世界の] 四隅 [に沿つて住む民族] が、すべて

*yayı  
ärmüş.*

[*türk* の可汗たちに] 敵 であった。  
などとしるべてくる。沙鉢略可汗は、文帝にあてた上表文中で、居住しつる陸地の限界外に横たわる「四海」つまり、地をとりまく、世界の絶対的限界についてのべてい

る。たとえば、*Tonyuquq* 碑文には、「私は海へ到達させた」とあるが、これは、恐らく、テュルク軍の、東方（東南方）への遠征の極限としている海が、まさに、上述のよくな限界と考えられていたことをしめすものであろう。テュルクが住み、可汗たちの居住地であつた「神聖な Örtükän の密林」が世界の中心で、そこから、彼らは、「世界の四隅」を征服するために、「前へ」、「後へ」、「右へ」、そして、「左へ」遠征したのである。

しかし、このよくな 海に囲まれた四角形の平坦な空間として考えられた水平的な宇宙構造論的世界像は、資料にしるされた宇宙起源論と同じく、恐らく、テュルクそのものの神話体系に固有のものとは言い難いであろう。内陸アジア、シベリアにおいて知られているこうした世界像は、古代、および、近年における、原始的な、また、発展した諸社会で、きわめてひろく流布していた。それが銘文に反映しているのは、古代テュルク社会が多様な文化的関連を有していたことをしめす証拠の一である。

大宇宙の叙述とならんで、銘文中には、人類棲息地域の境界をしめさずに、世界を地勢的にしるした、別の水平的世界像が存在する。この叙述図式における普遍的な標示は、*yer sub*（「地-水」）（または、*yer*（「地」））であつて、これは、銘文には、局部的でなく、「蒼色の天」と対立し

た全般的な、また、聖化された、そして、専門用語的な概念としてあらわされる。

さらにまた、この地勢的叙述と直接的に関係づけられるのは、第三の、民族名などによつてしめされた民族政治的世界像であり、その例として、「Qapayyan-qayan」と「turk-sir の民との地」、「uyjur の地」、「az の民の地」などがあげられる。この世界像は、出自にもとづいて組織された人間集団と、それらの「固有の地」とのあいだに存在した不可分の物的・感情的結びつきを反映してゐる。この民族政治的圖式にあつては、空間は、「自己の」空間であるか、「他人の」それであるかによつて、自己に救いをもたらすものか、敵意を有するものかに分かれる。前者は、たんに聖化されるだけでなく、「tütik の『神聖な地』」、「türk iduq Yer-Sub」などによつて、部族の神と見なされ、まさに、いのいとよつて、神話体系のなかへ組み込まれる。

宇宙の破局に関する神話は、オルホン碑文では、人間社会の混乱と、それを取巻く世界における変動とのあいだに想定された関係のなかに、それとなく見られる。世界の秩序のあらゆる紊乱は、国家における変動を招くのである。すなわち、

täpri yer bulyaqin tüčün  
天 地 の動乱のため、(toquz oyuz の民

yayı boltı.

は、我々の敵となつた。

としむれでいるが、とくべつある。このやつ悪い結果、國家の滅亡を招くと考えられたのは、ベグ (bag) たちと民衆との反乱、あるいは、天が「圧迫し」、地が「裂ける」災厄であった。いのいでは、反乱は、宇宙の破局と同一視されている。

宇宙の破局に関する神話のより完全な形、または、類似の神話の一つが、古代テュルク語の「占トの書 (Irq bitig)」のなかにふくまれていて、その XV には、つまのように見える。すなわち、そのさい、「上方では霧がおこり、下方では塵がおこった」。動物、鳥、「人の子たち」は、「道に迷つた」。いのいした状態は三年間つづいたが、「天の恩龍 (räpri gutti)」によつて終わつてしまつた。と。この叙述から、破局自体は、天の懲罰とされてゐたと考えねばならない。このさい注目されるのは、いのい、人間が、天地開闢についての叙述におけると同様、kisi oyul (「人の子たち」と名づけられてゐることである)。いのいテキストに稀にしか見られぬ表現は、十中八九、古風で、宇宙神話のスタイルとして、用語的に紋切型のものと評し

うるであろう。<sup>(6)</sup>

神々と神々の威力とにに関する諸神話は、資料には、きわめて不十分にしか語られていない。大抵は、神の名前は、その活動をしめすさいか、あるいは、一定の状況との関連においてのべられている。オルホン碑文には、たゞ、三つの神の名前があげられているにすぎない。すなわち、Täpri, Umay, そして、Idiq Yer-Sub (『神聖な地・水』)である。これらのうち、Täpri がほかの二神から明確に区別され、その働きが普遍的なため、若干の研究者は、古代

テュルクの宗教は、“Tengrism”と呼びうるような、独特の一神教に近い信仰——もともと、そのなかにはより古い諸層が存在するという条件つきであるが——であると評するに至つた。こうして、G=ドルファー (G. Doerfer) によれば、「古代テュルクの宗教は、これを三層に分けることができる。つまり、トーテミズム的、シャマニズム的、そして、sit venia verbo (「言葉にたいして寛容あれ」)、テングリズム的な層である」という。

オルホン碑文には、そこにのべられている神々に特有の働き、または、それらの権力分野を示唆する語句も、パンテオンを分類する特徴を直接しめす語句も見られない。I = V = ステエブリエーグア (I. V. Strelleva) は、古代テュルクの神々を「レベル」によって配置して、それら相互間

の関係を明らかにしようと試みた。すなわち、最高のレベルは Täpri、これにつづくレベルは Umay、第三のレベルは Yer-Sub、そして、第四のレベルは祖先崇拜である。そして、第一のレベルと第二のレベルの崇拜対象間、および、第一のレベルと第三のレベルの崇拜対象間には、それぞれ、「上一下」「天一地」の関係が存在するというのである。しかし、この見解にあつては、ただ、Täpri をパンテオンの頂点に置く点だけが、十分な説得力を有するにとどまる。

ところが、シベリア、内陸アジアの宗教的神話体系には、それ自身の、本質的にそれに固有の、パンテオンの分類方式が存在し、その神学・来世觀はこれにもとづいていた。この方式の基礎には、大宇宙を上界 (天界)・中界 (地上界)・下界 (地下界) の三世界に分ける考えが横たわり、これら三世界のあいだに、あらゆる生物、すべての神・精靈が配されているのである。この三分的觀念は、既存の水平的世界像を垂直的世界像によつて補うものであつて、その成立は、太古、シベリアの後期旧石器時代にまでさかのばる。近年にあつても、この三世界觀は、テュルク、モンゴル、ツングース諸民族のあいだで知られていたし、また、民族学的諸著作中に、これに関する記載が多く見られる。

ルーン文字テキスト中には、六一〇世紀のテュルクにおける三世界觀を直接にしめす文言はふくまれていない。天と地との対立は、或る程度確実に、古代テュルクの神話体系中に、神の威力が二グループ存在した事實を推定させるけれども、地下界に関する叙述が見られぬのは、古代テュルクの宗教觀と、いま問題にしている三分的世界像とのあいだの關係についての仮説を検討するためには、別の証拠を求めることが必要とする。このよつた証拠になると思われるのは、古代テュルク語のテキストに、地下界のもつとも重要で顯著な神、その君主 Ärklig があらわされることであろう。

八一〇世紀における仏教經典の古代テュルク語翻訳テキストに見える地獄 (tanu へソグド語 tmw' 「地獄」) の君主 Ärklig-qan は、い)では、ほかの主要な神々とは違ひ、その形態から見て、外国语の術語の直訳でない、テュルク語の語彙的特徴をそなえている。しかし、この事實だけで、Ärklig が、古代テュルク本来の神話体系にも存在したことを十分に証明できるであろうか。ところが、Ärklig を古代テュルク語ルーン文字資料中に求める可能性は、期待できないことではまつたくなる。

い)の暗黒の神に関する最古の記録と見なされるのは、このものといふ、Altin-köl 第一碑文において、その名前と

勵かといふ言及されてゐる。い)のテキストは、キルギズの可汗、Inarcu Alp Bilgä (Bars-bäg) の墓碑銘文で、確實に、七一一一七年に編年される。これは、被葬者が語るといふ叙述形式をとつていて、それには、「我々は、四人の、身分高きものであつた。我々を、Ärklig が別かれさせた。ああ!」とするされている。Ärklig は、可汗の靈魂を奪つて、彼を、兄弟から別かれさせたのである。こゝには、Ärklig とならんで、地獄の別の神、突然の(急速な?)死の精靈 Bürt と、「その若い仲間」とがのべられている。

さらにまた、Ärklig は、い)の碑文の二世紀あとに作成された資料に見られる。それは、敦煌の千仏洞から発見された、古代テュルクの信仰・迷信をしるした独特的「百科辞典」、「占卜の書 (īrq bitig)」であるが、これは、むしろ、『寓話 (箴言) の書』と称する方が正しいであろう。い)の「書」は多くの研究者によつて研究されたが、とにかく、こゝには、古代テュルク社会に弘布し、一般大衆の俗言を反映した寓話が集録されてゐる。

Ärklig の名前は、「書」には、三回のべられているが、もつとも興味をひくのは、つぎの寓話である。  
(XII) (a)r: (a)bca : b(a)rmīš: tayda :  
男-戦士は 狩獵に 行つた。 山で

q(a)ml(a)miš:  
シャマニズム儀式を行った。

t(ä)yridå:  
〔天に〕

yitiklig: k(ä)lir: tir:  
成年に達して、〔家へ〕帰る、—と語られている。

(a)rkl(i)g: (a)nyiy: (ä)dgu:  
(a)nča:bilipl(ä)r: (a)nyiy: (ä)dgu:  
Ärklig! (Ärkligは天の〔神〕!) (と言ひなが

このように知れ。大変。良へ。

tir: (ä)nča:bilipl(ä)r:  
tir: (ä)nča:bilipl(ä)r:  
Ärklig! (Ärkligは天の〔神〕!) (と言ひなが  
ら)、—と語られている。このように知れ。  
y(a)b(i)z: ol:  
悪くある。

いの寓話では、壇ト界の神す Ärklig や、天上界の  
神々の一つへ見なやのが罪ふれられぬか、いの寓話由体  
が、宗教的・道德的立場からやむなく天上界へ壇ト界へ対  
立をなへること。

(LV) (a)lp:(ä)r: oyli: süka:b(a)rmis:

勇士-戦士 の息子は、戦闘に行つた。

sü:yirintä: (ä)rklig: s(a)bči:  
戦場で、Ärkligは、「彼を自分の」使者

tör(ä)tniš:tir: (ä)bip(ä)ri:  
とした、—と語られている。自分の家へ

k(ä)ls(ä)r:özi:at(a)nniš:  
帰るとき、彼自身、有名になって、

ögr(tü)nc̄tilig: ati:

喜んで、その〔男子の〕名声が

yitiklig: k(ä)lir: tir:  
成年に達して、〔家へ〕帰る、—と語られている。

(a)nč(i)p: (a)lqu: k(ä)ntü:  
Ärklig! (Ärkligは天の〔神〕!) (と言ひなが  
ら)、—と語られている。このように知れ。大変。良へ。

この運命は、Ärklig (来世)である Ärklig (の手中)

にある。

古代ノルクの神話体系を理解するのに必要な知識など  
寓話の 100 以上 XIX やある。その頭は aq: (a)t と略す

れられるが、それじゅふじゅ、いだを、aq : (a)t(a) と読むハ  
じめ可能である。ルーン文字資料では、語末の母音は標示  
されるのが普通であるが、この「書」には、書き手の不注  
意からする、文字の脱落・交替が少なくな。いの」とか  
い見る」と、書き手は ta の a を脱落せし、たんじ t と  
しるしたるものと考えられる。いのとがに詮正したつべで、  
本寓話を転写・翻訳すると以テの如くである。

## (XIX)

aq : (a)t(a) : q(a)r̄(I)n :

白い 父は、〔信仰上の?〕自分の敵たちを、

üč : boluryta : t(a)lup(a)n : (a)y(a)nqa :

三 世界で 選んで、 犯 権 へ、

öttügkä : idniš : tir : qorqma :

祈願へ 送った、一と語られている。「恐れるな!

(a)dgiit : öttun : (a)yinna : (a)dgiit :

よく 祈れ! こわがるな! よく

y(a)b(a)r : tir :

頼め!」「と 命じながら、一と語られている。

(a)nča : bilig : (a)dgiit : ol :

このように 知れ。 良く ある。

いのとがふれて云ふ、「白い父」とは、定めに従つて白

衣をあとさ、白い典礼帽をいただいた、マニ教共同体にお  
ける高級聖職者の一人にはかならない。テュルクのマニ教  
にあひて、マリその人をはじめ、いつした人々を「父」と

呼ぶのは普通のいとであった。

いと考ふると、いの寓話には、古代テュルクの異教世界  
の上層部における「信仰闘争」に関する、また、シャマニ  
ズムの精靈・神々が住む天上界・地上界・地下界へ運ばれ  
たマニ教布教師団に関する、さらに、それらの住民——マ  
ニ教の敵たち——の、新しい信仰への服属・改宗に関する、  
独特の叙述がよくまれていると見てよい。周知のようすに、  
マニ教は、「改宗」した現地の神々を、自ら進んで、その  
パンテオンのなかへ組みこむとともに、それらと結びつい  
た觀念をも受け入れた。マニ教自身には、「三世界」とい  
う概念は存在せず、その神学・來世觀は、主として、古代  
テュルク語で、それぞれ, iki yiltiz, üč öd と翻訳される  
「三つの原理」「三つの時」にゆづけていた。

いとへて、古代テュルク語ルーン文字テキストに、地下  
界、死者の君主であり、人々を「別かれやせ」「死の使  
者」を生者の世界へ送る Ärklig の名が再三挙げられて  
いる」とが確認できる。おやしゃ Ärklig は、各人の運命  
を決定して、生命をもれどり、靈魂を奪い去るのである。  
そうだとすると、(a)筆者が復元しようとしている古代テュ  
ルクの神話体系のなかへ三分的世界像をふくめ、(b) 最古の  
テュルクにおける神話創作イデオロギーに固有の原則に従  
つて古代テュルクのパンテオンを分類する」とは、けつし

て不當ではないと思われる。

古代テュルクのパンテオンにおける至高の神は、天界の神、Täpri（『天』）である。それは、「宇宙の一部」としての天とは違つて、kök（「蒼色の天」、「天」）、または、qalıq（「蒼穹」、「近い天」）と呼ばれることはけつしてない。おもに、Täpriは、時としてほかの神々とともに、世界におけるあらゆる出来事をとりしきり、何よりもまた、Täpriは、「（人世の）期間を決める」としるされているよう、人間の宿命をあらかじめ定める。しかし、そうであらが、「人の子たち」の出生を司るのはUmayであり、彼らの死を司るのはÄrkligである。Täpriは、可汗たちは賢明さと権力とを、民衆には可汗たちを賜わり、可汗たちに叛いたものを罰し、やがて、可汗に「命じて（yalrıqa-）」国事・軍事を決定しさえする。Taspar-qayan（他鉢〔佗鉢〕可汗）と功業を共にしたものの一人である可汗の一族、Mahan-reginの墓碑、ソグド語でしるされたBugut碑文には、可汗が、国事の決定にさへして、つねに、神（神々？）にたずねた質問についてのべられてゐる。Täpriは、明確には擬人化されていず、或る種の人間的感覚を有するものとされ、また、自分の意志を言葉によつて表現しはするが、自分の決定を、直接的な働きかけによつてではなく、その代理——「自然の代理物」と

人間と——を介して実行に移す。これにたいして、ハザール可汗国の西テュルク諸部族の神話体系にあつては、「天」は、いつそう明確に擬人化されている。「アルメニア人は、七世紀の八〇年代に、アルバニア人主教イスラエル（Israel）によって行われたハザールの一部の洗礼についてのぐるにゐるとして、Tengri-hanを、北カフカス地方のハザールの主神と呼び、彼らは、それを、「奇怪で巨大な英雄」、「獮猛な巨人」と考えて、それに喬木をささげ、馬を犠牲に供するとしている。これに似た「天」崇拜の特徴は東テュルクにおいても見られ、中国史料には、「テュルクの可汗たちは、毎年の春、中央モンゴル高原のTamir川の流域で、『天』の神にたいして供犠（馬と羊との屠殺）を行つた」とのべられている。敬虔なムスリムであったMahmud Kashgariは、「高山」、「大木」をTen-griの語で呼ぶ「異教徒」テュルクについて嘆いてゐる。そして、まことに、東テュルクの可汗たちと「民」とが、高山上において、「天の靈魂」にたいして祈願を行つたといふ記録がある。<sup>(10)</sup>

Umayは別の神、すなわち、女性的原理を擬人化した豊饒の女神、新生児の保護神であつた。上述のイスラエルが、七世紀に、西テュルクにおけるこの女神の神官たちに言及したるAphroditeと名づけているのは、この女神

の「」とほかなりある。一〇世紀における古代ウイグル語テキストでは、この女神は *ädgüütig uma-qatun* (「良き Uma-王妃」) と称され、テュルク仏教のペンテオンのなかへいられられてくる。また、Umay は、Täpriとともに、戦士たちをもむるものである。*erhüllt* 「隠すが、そのイメージからして Täpri に似てゐる (*täprikan*) のと同様、その夫人・王妃は、Umay *täg ögüüm qatun* (「Umay のよくな私の母・王妃」) と云う表現から明らかにな」「」、Umay に似てゐるのである。したがって、Täpri と Umay と云う神の夫妻——その地上の位格は人間界における君主夫妻である——に関する神話が明示され得る。

地上界における主神は、「神聖な地-水」であった。オルホン碑文には、この神は、いずれの場合にあっても、それだけ独立してはのべられていないが、Täpri, Umay (または、ただ Täpri だけ) とともに、テュルクをまもり、叛いたものを罰する。イエニセイ銘文では、地下界へ去つた墓碑銘文の主人公は、彼が、天上界の象徴である太陽・月からとともに、「私の地-水 (*yerim subim*)」つまり、地上界からも去つたことをのべてゐる。外国の著者たちによると、「地の神」は、テュルクのあいだでは、特別な崇拜対象であった。たとえば、テオフィラクトース・モカツテスは、テュルクは「地にたいして賛歌をうたう」としるし

てゐる<sup>10</sup>。前述のアルメニア人は、ハザールの「地を呼び出す」「妖術者たち」、および、ハザールにおける地と水との供養に言及してゐる。さらに、中国史料では、六世紀のテュルクが崇拜した聖山は、「地神」と呼ばれてゐる。古代テュルク諸部族にあっては、神聖な山頂の信仰は、全体的な「地-水」信仰の一部であったのである。

『丘の書』に見られる「あの二神の働きと、パンテオノにおけるそれらの位置とをどのように解釈するかは、もへじの困難な問題である。

(II) *ala : (a)tlıy : yol : t(ä)yri :*

まだらの馬に乗った道の 神

(XLVIII) *q(a) ra : (atlıy) : yol : t(ä)yri :*

黒毛の 馬に乗った 道の 神

これらの中後者は、従来、原文のままに、「黒い、道の神」または、「黒い道の神」と翻訳されましたが、前者から見て、上にしめしたように *atlıy* の語が脱落していると考えた方が正しいであろう。前述のアルメニア人は、七世紀の西テュルクにおける神々のなかに、「道々の或る種の神々」をあげてゐる。L.P. ポタ波ーフ (L.P. Potapov) の調査によれば、まだらの馬に乗った道々の神と云ふ「ヤマニズム的な姿が、「地上の道々の神」と云う名称で、一〇世紀初頭まで、Teleut 族のあいだに伝えら

れていたという。

さらに、『占卜の書』と同じく敦煌の千仏洞から発見された古代チベット語の占卜の書のなかに、「北方の八地域」についてのべられ、それらの首都は Su-bal-iq 域で、そこでは、「テュルクの神」 Yol täpri が崇拜されているとするされてくる（以上、いざれも、テュルク語転写）。Mah-mud Kāshgari によると、Su 城は Balasaghun の近くに存在したという。とにかく、外国の観察者にとって、yol täpri は、テュルクの国家的信仰ときわめて密接に関連していったのである。

寓話 II には、「私は、まだらの馬に乗った道の神 (yol täpri) である。（中略）私は qut を与えよう。（後略）」また、寓話 XLVIII には、「私は、黒毛の馬に乗った道の神である。（中略）私は國家 (il) を造った。（後略）」とある。すなわち、一つの yol täpri の働きは、人間に qut (神の) 恩寵・威靈 を与え、他の yol täpri のそれは、国家 (il) を復興して「造る」ことであったのである。」の叙述から考えて、これらは、十中八九 天の神 (Täpri) の使者、その意志の直接的な実行者であると見てよい。ルーン文字碑文には、ほかならぬ Täpri が、恩寵を天降すか、または、「命じ」、テュルクの国家 (il, el) を建設・復興させたといふ例が数多くしるされている。国家そのもの

は、イエニセイ銘文では、täpri il (el) 「神の il (el)」と称されている。以上の解釈が正しいとするべく、yol täpri は、下級の神々、Täpri 一族の下級の成員で、それらは、つねに道において、Täpri の意志を実行に移し、天上界と地上界とのあいだをとり結ぶものであり、それは丁度、たとえば Bugut 碑文に見られる」とく、可汗たちが、「天」に向かって質問・懇願して、地上界と天上界とあいだを「逆方向に」とり結ぶとの同様であるといふことになる。「天」と直接交流する可汗たちのシャマン的機能については、すでに、護雅夫が注目している。

神による国家の創造 天による可汗たちの誕生に関する、そして、王朝または部族の始祖となつた天の動物に関する諸神話は、ルーによって詳細に研究されている。しかし、彼がのべていることに加えて、「天に似た」「天から生まれた」テュルクの可汗たちについての諸神話は、比較的のちになつて発生したものであることに注意しておきたい。それらは、すでに成立していた古代テュルク国家において六世紀以後に生まれ、テュルクの il (el) の起源に関する神話と密接に関連している。この神話によれば、まさしく Täpri が、それを、五三五年ごろに創造したのである。このことは、沙鉢略可汗が、五八五年に、隋の文帝にあてた上表文中で、「突厥自天置以来、五十余載<sup>12</sup>」とする

しているのから明らかである。オルホン碑文は、可汗の氏族の起源が「天」にあることをつねに宣明している。TäpriとUmayとを、可汗の氏族をまもる神の夫妻として表現することとともに、この一連の神話は、それらが階級社会で生まれたことを明確にしめす痕跡を有しております。

テュルク可汗国の国家的信仰の、疑つべからざる一部であった。この信仰を個々に構成したのは、可汗自身が最高司祭の役割を果たした「先祖たちの洞窟」「先窟」での供犠、故人となつた祖先・可汗たちの崇拜、可汗たちの埋葬複合体・碑文の建設であつて、これらはすべて、ルーン文字テキスト、または、外国の観察者たちの情報のなかにしるされている。

「始祖たち・文化英雄たち」に関する叙述をもふくむテュルクの系譜的諸神話の検討は、別著でこれを行つたから、ここでは省略する。「始祖たち・文化英雄たち」とは、「火を出だしてこれ（テュルク）を温養した」訥都六設、「すぐれた能力」によつてぬきんでていた、氏族の創設者その人、阿史那などである。

このように、ルーン文字資料が与える情報は断片的であるけれども、それらは、非常に古風な層（トーテミズム的な系譜をしめす神話、宇宙の開闢を語る神話）とともに、公権力のエリート的で神聖な性格がはつきりとあらわれ、古代テュルク諸国家において形成が完了した比較的新しい層をもふくむ、古代テュルク諸部族の複雑な、また、発達した神話体系を明らかにしてくれるのである。

にもとづくものがあり、疑問・問題を残す点、あるいは、解釈過剰と思われるところもないではない。それらは、註(1)・(2)・(3)・(5)・(6)・(9)・(10)・(11)・(12)で指摘しておいたが、これらは、論文全体から見れば僅かな瑕瑾であつて、クリヤシュートールヌイの論旨にそれほど大きな影響を与えるものではないと言つてよからう。

本論文は、古代テュルクの神話体系と、それにつかわる諸問題とを、同時代資料のみにもとづいて、じつに明確に解明したものと評しうる。

## 註

(1) 沙鉢略可汗と啓民(啓人)可汗との上表文中には、それぞれ、「伏惟大隋皇帝之有四海、上契天心、下順民望、二儀之所覆載、七曜之所照臨、莫不委質來賓、回首面内。実万世之一聖千年之一期、求之古昔、未始聞也」、「大隋聖人莫緣可汗、憐養百姓、如天無不覆也、如地無不載也。諸姓蒙恩、赤心歸服、並將部落歸投聖人可汗來也」とある。従つまでもなく、これら、或いは、これらに類する表現は、中国の皇帝の威信が天下にくまなくおよんだことを贊える、中国文に常套的なものであつて、「古代テュルクがいだいていた世界像をしめす重要な証拠である」とは称し難い。

(2) クリヤシュートールヌイがあげた論拠だけから、*kök qalıq* または、*qalıq* を、「近い天」と解釈するのには疑問が残る。

(3) 註(1)参照。

(4) 原文には、*tičinč ylta* (「三年目に」) とある。

(5) 霧・塵がおり、動物、鳥、「人の子」たちが道に迷ったのを、「宇宙の破局」と解釈してよいかどうかは問題である。

(6) *kisi oyli* についてのべた箇所の前文に、*qus oyli* (「鳥の子」), *kiyik oyli* (「鹿(野生動物)の子」とある)のから見れば、*ni* の *kisi oyli* だけをとりあげて論ずることはできない。

(7) *Altın-köl* 第一碑文については、拙稿「アルトウンキヨル第一碑文考訳」を参照されたい。『東方学』第七四輯、一一一七頁、昭和六一年七月。

(8) *ti* (「語」) の主語が、三人称単数であるか、三人称複数であるかは、V=トムセン (V. Thomsen) がのがべているようによく明らかでない。クリヤシュートールヌイは、これを三人称複数ととり、「人々は、……と言つてゐる」と翻訳している。こゝでは、「……と語られてゐる」と意訳しておく。なお、トムセンは、翻訳に当たつては、*tir* の語を省略している。

(9) いれは、P.=ペリオ (P. Pelliot)、劉茂才が行った、『周書』<sup>○</sup>卷五 突厥伝の記事の翻訳に携つたものであるが、

原文は「又以五月中旬集他人水、拜祭天神」であり、「供犠を行つた」という語句はない。クリヤシュートールヌイが「供犠を行つた」としゐしたのは、ペリオ、劉茂才が、「拜祭天神」を、それぞれ Sacrifier au dieu du

Ciel, um den Himmelsgott zu opfern へ翻訳してゐるからであろう。また、「他人水」を Tamir 河に比定する確実な根拠は存在しない。<sup>※</sup>クリヤシュートールヌイが「馬と羊との屠殺」と補足してゐるのは、『隋書』卷八 突厥伝に、「五月中、多殺羊馬以祭天」とあるのを考慮したためもあるうが。

(10) クリヤシュートールヌイは、いゝの註に、ペリオの論文をあげているが、それは、『周書』突厥伝の「於都斤西五百里、有高山迫出」という記事を翻訳し、それに説明を加えた箇所であつて、クリヤシュートールヌイがしているようないきなりの記事ではない。

(11) täprikän を「Täpri に似てゐる」と翻訳することには問題があつた。

(12) いの「五十余載」を額面どおり受け取るのには疑問がある。

(13) 本稿では、紙幅の関係上、いれらの紹介は省略せんねえやべんなかった。

S. G. Kliaštornyj, "Mifologičeskie sjužety v drevnetjurskikh pamyatnikah", *Tjurkologičeskij Sbornik*, 1977, Moskva, 1981, ss. 117-138.